

「平和の好意」の情熱 数々のCIAの「進進」

林 最近はどうのような活動をされていますか。

山田 わらじの履きすぎなんですよ(笑)。今、お茶の水女子大学の大学院で博士論文を書いています。また、作家としては、先日大学生用の教科書を執筆しました。年内にあと1、2冊出版する予定です。

林 博士論文のテーマは何ですか。
山田 テーマは「カウラ事件」。

第二次大戦中の1944年8月5日、つまり終戦の約1年前に、オーストラリアのカウラにあった戦争捕虜収容所で勃発した大規模な暴動です。この事件では最大で1104人の戦争捕虜が、ある夜一斉に収容所の鉄

条網を乗り越えて飛び出そうとするんです。実はこれ日本人捕虜達が起こした事件なんです。ところが、当の本人である日本人の大多数がいまだに事件について知らず、片や、

オーストラリアでは私の調査によれば約8割の人が事件について知っています。日豪関係史の中で大きなトピックと言ってよいでしょう。この暴動がもとで234人の日本人と4人のオーストラリア兵が死亡。生き残った800数十人の日本人捕虜は日本に帰国しましたが、そのうちの約8割は戦後も捕虜であった事実を隠して生きてと言われています。戦後、日本の国が大きく変化したにもかかわらず、約8割の人たちは変われなかった。教育というものがいかにか恐ろしいものかということ、カ



真美氏

山田
(作家、

目印芸術研究所言語センター長)

ウラ事件は示しているのではないのでしょうか。91歳になられる元捕虜の男性が「生きている間にもう一回、

外国で知らされた日本の良さを 日本文化の深さを

いま立ち止まって足元を見直すチャンス

偶然の出会いが、人生を大きく変えた。そして未知の国インドへ。スラム街で会った人の表情もなぜか、輝いてみえた。不思議な国であった。かたちや数字だけが価値観になってしまった日本。インドにはそうした価値観を超えた深い心があった。アジアの文明文化を創出した国。そんなプライドもあった。日本人は、戦後ただがむしやりに突っ走った。そのため失ったものも大きい。いま、日本人は少し立ち止まって自分を、日本を見つめ直すチャンスかも知れない――。

カウラに行きたい。連れていってく

力です。

れ」と懇願されまして、ああ、カウラに行つて重い荷物を下ろさない限り、この方の人生に悔いが残るのだからなどと思い、先日カウラにお連れしたんです。するとABC（オーストラリア国営放送）をはじめ、マスコミ各社が待ち受けており、この事件がオーストラリアにとつていかに

林 大学生のためにどのようなテーマで、教科書を書いたのですか。

大きいものか再認識しました。また私は戦争を知らない世代ですが、当時の日本人のメンタリティーについて深く考えさせられています。

山田 教科書を手がけたのははじめてで、2年間かけた共著です。図書館学の教科書です。不思議なご縁があつて、書くことになりました。総務省や文科省などの後援で毎年行

わかれて「図書館総合展」という大きな催しがあります。要は図書館の未来について皆で考えようという

試みなのですが、何年前に私のところにパネリストの要請がありました。そこでインドのランガナンという数学者の話をしたんです。ラン

ガナンは、南インドの出身で、図書館分類学の父として世界的にも有名な方です。どういった土壌がそういう

抜きだした人たちを生み出すのか、文化などさまざまな側面からお

大切。相互理解の原点です。言葉は

話させていただきました。そうしたら、話が面白かったからと翌年の図書館展にもパネリストとして呼んでいただいた。図書館のシンポジウム

林 素晴らしい研究ですね。日本とオーストラリアの架け橋ですね。

山田 よく「黙って見つめ合えば言葉は要らない」と言いますが、とんでもないと思う。異文化と出会ったら自分の考えを言葉に示すことが

大切。相互理解の原点です。言葉は

話させていただきました。そうしたら、話が面白かったからと翌年の図書館展にもパネリストとして呼んでいただいた。図書館のシンポジウム

山田 よく「黙って見つめ合えば言葉は要らない」と言いますが、とんでもないと思う。異文化と出会ったら自分の考えを言葉に示すことが

大切。相互理解の原点です。言葉は

大切。相互理解の原点です。言葉は

話させていただきました。そうしたら、話が面白かったからと翌年の図書館展にもパネリストとして呼んでいただいた。図書館のシンポジウム



林 明夫氏

(開倫塾代表取締役社長・塾長)

に何度か出させていただきました。そうこうしているうちに図書館の教科書を書きまかせんと声がかかったわけです。私は高野山大学の大学院修士課程で密教学を修めました。が、仏教的視点で見れば図書館イコール経蔵なんです。お経を置いておく場所です。私がよく行くヒマラヤのお寺では、経堂とか経蔵といわれる場所には、英語でライブラリーと書いてあるんですよ。そしてこの経蔵こそが、インドにおける図書館の始まりなんです。インドには、今のヒンドゥー教のもとになる、バラモン教という古い宗教がありました。その宗教は図書館を持った形跡がないんです。誰もが教典を読んでいるわけではない。少しでも発音を間違えると効果が失われる呪文も教典に含まれるので、師匠から弟子へと口伝するしか方法がなかったとも言えます。しかし、その後に登場した仏教が万人の平等を説いたため、お釈迦様の教えは誰もが読めるように葉っぱや巻物に書かれ、写経僧たちが手で書き写して、すべてのお寺に入りました。それがインドにおける図書館の始まりです。



やまだ まみ

1960年長野市生まれ。3か国5大学で経済学、海洋学、密教学などを学ぶ。密教学修士（高野山大学）。インド文化全般、特にインド神話に造詣が深い。全インドマジック大会審査員を務めるマジック通でもあり、2011年には14歳の少女マジシャンをムンバイから招聘し大震災被災地の小学校と老人ホームで慰問公演を開催した。長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績により2007年、インド国立文学アカデミーよりドクター・アーナンド・クマラスワミ・フェローシップ。日本文化デザインフォーラム会員、宇宙作家クラブ会員、国立天文台広報普及委員会委員。現在はお茶の水女子大学大学院博士後期課程に在籍し、ライフワークの「カウラ事件」を研究し続ける現役の「女子大生」。公益財団法人日印協会理事。

著書に『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』。近代史上最大規模の戦争捕虜脱走事件（カウラ事件）を追った『ロスト・オフィサー』など多数。訳書に『生きて虜囚の辱めを受けず』。

スーパードロウの会 インドに求めた新天地

林 図書館という切り口でたくさん教えていただきました。ところで、山田さんはどのような生活をなさっていますか。

山田 私は長野市の出身で、高校卒業まで長野市で暮らしました。鬼っ子といいますが（笑）、考え方が一族の中で一人だけ変わったんです。周りにはほぼ全員公務員で、起る時間から寝る時間まで一糸乱れず、来年の何月何日まできちんと計画されているような統制のとれた家でした。私だけが、行き当たりばった

りて、面白いと思ったり、予定ががらっと変えてでもやる。一人だけ違ってはいたんです。子どもの頃の私が魅かれたのは外国の風景でした。私は1960年生まれで、その頃家にはテレビがありませんでした。テレビにつかまってよちよち歩きをはじめました。物心ついた時には、テレビを浴びるほど見ましたが、アメリカのホームドラマが多かったですね。言ってみれば、アメリカ人の生活が透けて見える箱がお茶の間に置いてあったようなものです。海の向こうにある世界に行ってみたい。そのためには英語が出来なければダメだと、かなり早い段階で気づいていました。

もちろん、家では誰も英語はしゃべれませんでしたし、誰かから習うこともできません。今と違って、長野県程度の地方都市には外国人もいないんです。自分の中に英語を学びたい欲望はありましたが、中学校では一度も外国に行ったことのない日本人の先生から英語を学びました。しかし、その先生が読んでくれた英語を聞いた時は、身震いしましたね。恋に落ちたと言っているいかも。こんなにきれいなリズムがこの世にあるなんて。絶対に私はこの言葉を生涯の友にしたいと思いました。最近、この先生にお会いする機会があったので、「先生が熱意を持って教えて

くださったから今の私があるんで
す」と言ったら、その先生、なんと
おっしゃったと思います? 「真美さ
ん、ごめん。本当は俺、英語嫌いな
んだ」と。「英語を好きになれ。好
きになることが上達の第一歩なん
だ」とあんなに毎日言っていたらし
やっただのに……。先生は国語の先生
になりましたけれど、志望者が多
くて、仕方なく英語を教えていたそ
うです(笑)。人生なんて分からない
ものです。私は、中学1年のと
きに、英語を自由自在に使いこなせ
る人になることを自分自身に誓いま
した。そのためだったら、どんなこ
とでもしようと思いましたが、「英
語を学びたいんだけど、ちっとも上
達しません。いいですね、山田先生
は才能があつて」と言う人がいま
すが、それは違うと思いますね。「才
能がないから」「難しいから」果
ては「時間がないから」英語は無理と
いう人がいますが、それはただの言
い訳。英語ができるできないは、才
能よりむしろ情熱の問題だと私は思
います。自分が子どもの頃に覚えな
かった言葉を新たにやるというのは、
ほぼ不可能なことへの挑戦です。才
能の問題ではなく、情熱と時間の問



はやし あきお

1950年生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒、同大司法研究室研究員、世界銀行研究所、ハーバード大学行政大学院国際開発研究所民営化短期集中コース修了、宇都宮大学院工学研究科客員教授。全国大学解放機構理事。
開倫塾は1979年創業。栃木、群馬、茨城の北関東に64校舎展開、塾生数7000人。
ほかに役職として学校法人有朋学園 有朋高等学院理事長(福島市)
マニエ株式会社顧問(元社外取締役)、足利市経済活性化諮問会議会長、公益社会法人、経済同友会、幹事、サービス産業活性化委員会副委員長、同友クラブ理事、行政改革・アジア・中国・アフリカ・ロシア・政治とグローバル人材育成・産業構造改革・企業法制・教育他。学校と企業経営者連携推進・観光など委員会委員。
World Economic Forum on East Asia, India, New Champion
社団法人栃木県経済同友会幹事、群馬県経済同友会特別養護老人ホーム清明園理事(足利市)、社団法人栃木県生産本部常任理事、栃木県経営品質協議会副会長、栃木県教育委員会、栃木県社会教育委員、会議委員
足利商工会議所議員
開倫研究所所長、教育経営品質研究会主宰

題です。
林 どのような勉強の仕方をしたのですか。
山田 高校に入学するやいなや、英語劇のクラブに入ったんです。そこには、シエイクスピア・オタクの先生がいて、シエイクスピア劇に特化したクラブでした。一年生のときに、リア王の一つの役をいただいたんですが、大量の英語を覚えなければいけなかった。シエイクスピアの英語は現代英語とはかなり違うわけです。こんな覚えられないと思っただんですが、プロジェクトは進行しており、誰か一人でも脱落してしまつたら、劇ができなくなる。みんな

なが死に物狂いで覚えるんです。私も先輩の姿を見ながら死に物狂いで頑張つて。しまいに知恵熱まで出ましたね(笑)。英語自体が分からないのに、とにかく丸覚えですよ。ところが3カ月くらいして、祖母の家に遊びに行ったときに、「あなた、一晩中、寝言を言っていたけれど、知ってる?」と言われました。何言ってるか分からないけれど、英語で一晩中しゃべっていたって。そのへんから、脳がどんどん英語に対して開かれていったと思うんです。私の場合は、シエイクスピアの訳の分からない英語を必死で覚えるうちに口

がどんどん動くようになって、耳も鍛えられた。数か月経って、文化祭で上演するまでにはかなり流暢にしゃべるようになりました。劇ですから、何百人の前でやりますので、人のまれない。大きな声で表現するということも同時に学びました。その後、明治学院大学入学と同時に上京し、花の一人暮らしが始まりました。うちはお金持ちじゃありませんので、余計なお金がかかった。私立の東京の学校に出してくれただけでも有難いんですが、英語の勉強をとかく本気でやりたいと思つたんです。ミッション系の学校で白金台というおしやれな立地ですから周辺には英語の個人レッスンをしている教



「深呼吸をして一度じっくり考える今がチャンスなのです」と山田真美さんと林明夫氏

室がたくさんありました。ところが実際に行ってみると、そういうところはあり得ないほど料金が高いんです、一介の大学生には無理で、お金持ちしか、教育は受けられないのかと、さすがの私も一瞬めげかけました。でも、ラッキーなことが起こりました。スパーに行つたときに、家具売場のレジで黒人のご夫婦が探めていたんです。ちょっと耳を澄ませたら、英語の出来ないレジ係と日本語の出来ない黒人のご夫妻が意思の疎通を欠いて困っているようでした。

たので、「通訳しましょうか」と申し出たところ両者から大変感謝されました。ご夫妻から夕食にお誘いいただき、高級なレストランに連れて行ってもらいました。いろいろお話をしたところ、ご夫妻は某国の大使館勤務で、私とは妙にウマが合ったんですね。「それだったら、日本に遊びにくる友達がいるから、一人じや日本語が分からない人は出歩けないから、英語のガイドをやってもらえませんか」と言われて、それを機に、時々英語のガイドを頼まれるようになりました。最初のうちはお金ではなくて、その代わりご飯をおごってもらっていました。でも、常にそういう仕事があるわけではありませんが、暇なときは浅草寺に行き、人のよさそうな外国の老夫妻などを選んで「私は今英語の勉強をしているので、ガイドを無料でさせていたいただきたいのですが、いかがですか」とお願いしました。大抵の場合、喜んでガイドをお願いされましたよ。そうやっているうちに、口コミって恐ろしいもので、「あの面白いよ。プロジェクトやないけれど、一生懸命やってくれる」とだんだん、お客さんが増えてきて、いつのまにか土・日に

は通訳のアルバイトをやるようになっていたんです。初めは道案内だったのが、ちょっとした会議の通訳など、次第にハードルが上がっていき、次第にハードルが上がっていき、大学2年のときに初めてアメリカに行ったのは、そんなふうに通訳でためたお金です。あれは大学2年の終わり頃でした。大事な方たちが来るので、あなたも来て下さいと誰かから頼まれたんですよ。行ってみたらインドの国会議員10数人と、秘書、随行者らが大型バス3台で東京を視察すると。私は2号車のお世話をしろということでした。万が一私がついても誤訳をして、国家関係にヒビが入ったら大変、と本当に気を遣いましたね。一週間の東京視察を終えてご一行がインドに帰国される時成田空港までお送りしたところで、2号車に乗っていた、一番若かった当時27歳くらいのダルビル・シンさんという国会議員の方が、「楽しい日本滞在でした。きめ細やかに2号車の世話をしてくださったことに感謝しています」と言ってくださったんです。続けて「卒業したらどんな人生を歩まれる予定ですか」と聞かれ、当時思っていた通りに、「何らかの形で国際的な仕事を

をしたいと思っています」と答えました。話が前後しますが、私は9歳のときに作家になると決めていたんですが、作家になるためには、広い見聞が必要で、そのためにも海外に留学したいという強い思いがあったので「英語圏の国に行つて、勉強を続けると思いました」と答えました。すると、ダルビルさんは「それはよい考えです」と言つた後で、一呼吸置き、「しかし、あなたはインドという国があることをまだ知らない。あなたがインドという国に興味を持つたら、インドにいらつしやい。あなたは、実はインドへ行くために生まれて来た人なんです」とまるで謎々のようなことをおっしゃるばかりありませんか。その後、私は大学卒業と同時にオーストラリア留学、さらにアメリカでの仕事などをするのですが、最終的にはダルビルさんの予言通りインドに行くことになるのですから。まあ不思議と言つてこれほど不思議なことはありません。最初にインドを訪れたときはインド政府の接待でしたから、それはもう大名旅行でした。一応旅のテーマを提出してくださいといわれたので「インドマジック」と書いて出しました。

というのも、その頃読んでいた本の中に、インドのマジシャンについて書かれた面白いエッセイがあったんです。それによれば、インドには水の中に2時間も潜っていられる物凄いマジシャンがいると。今なら大笑いするところですが、インドのことを何も知らない当時の私は、ヨーガの行者ならそういうことが出来るのかな、と思ったんですね。それで「インドマジックの研究をしたい」と書いて出したところ、インド政府の方達から「それは面白い」と言われたんです。「インドのお家芸でありながら、インドでは廃れて、マジックは絶滅危惧種である。しかも、インドの研究者でそんなことを研究している人はいない。外国人のあなたがそれを掘り起こすことによってインド人はみずからのアイデンティティを再認識することになるかも知れない」と。そんなわけでインドマジックを研究することになりました。その後行く先々で、いろいろなマジシャンに会いました。インドに行ってみてわかったんですが、ダルビル・シンさんの見立ては正しかった。それまでもいろいろな国に行っていますが、インドほど居心地のよい国は

なかった。家に帰ってきた、という感じですね。行く先々で親友が出来ちゃうんです(笑)。あれやって、これやって、と仕事がどんどん舞い込んで、面白いから片っ端から引き受けていたら3カ月経って日本に帰ってきたときには、どんなに頑張っても、この一生で終わらないくらい仕事を受注していました。来世の来世の来世までかかるくらい(笑)。私とインドとの付き合いは、そんな感じで始まったんですね。

林 インドは今どんな状況ですか。

山田 昔も今も、インドはとにかく人材が凄い。スラム街で会った人も輝いている。貧しい人の中にも、磨けば光る人材が揃っている。これはとんでもない国だなと思います。最近のインド人の活躍をみるにつけても、当時から私の直感の間違っていないかっただけだと思います。彼らの才能は何なのか。いろいろ考えるとまず一つ、日本人にないインド人の特性として、自分を愛する才能を挙げたいですね。自分が最高、自分万歳。宗教だったら、「俺教」です。日本人はすごく謙遜しますよね。それは、あるところまでは美しいし、社会の秩序を保つためにも素晴らしい

いと思いますが、世の中には限度というものもあります。

林 自分の息子にも愚息とか、奥さんにも愚妻なんて言葉もあります。

山田 全くその通りです。インド人の自分に対するポジティブさは私にとって、衝撃的でした。世界で一斉に「あなたは幸せですか」というアンケートをしたら、インドは世界のトップだったんです。それほどまでにインド人の自己肯定度は高いのです。基本的には、「ごめんなさい」さえ言わない。最初にインドに行ったときに、ヒンディー語を習ったんですが、その先生から、「ごめんとという言葉はヒンディーにはないと思え」と言われました。日本で買ったヒンディー語の本には載っているんですが、「それはインド文化ではない」と言うんです。その先生曰く、「私は80何年生きてきて、一度もごめんと言ったことはない」と言うんですよ。これはすごいと思いましたね。

**中間層少ないインド
トップ人材生まれない日本**

林 インドから見て、今の日本をどのようにお考えですか。

山田 両方の国を見て、面白いと思うのは、こっちに欠けているものがあっちにあって、あっちに欠けているものがこっちにあります。ある意味、正反対なんです。インドにはトップとトップぽいものもなく、日本は、トップもトップぽいものもなく、中間層にかたまっています。まさに、両者は、実はお互いにもいものを持つているんですね。インド人の目で日本を見てだめだと思うのは、トップがいらないことです。頭がないのに、生きている生物という感じ。理由ははっきりしていて、教育の問題です。トップを作れない教育、中間層だけを大量生産する教育。かけっこで、全員で手をつないでゴールしましょうというのがありましたが、日本でおこなわれているのはあの教育です。

林 おかしいですね。やさしさの意味を取り違えています。

山田 いま、日本で行われているのは2タイプの子ども達を犠牲にした教育です。つまり、中間層だけにターゲットを合わせ、その上と下は斬り捨てる。上と下は活かさない。活かそうとしない教育です。差別することと持っているものを活かすことは全く別の話です。差別をせずし

かも持って生まれたものを活かす、これこそ智慧です。それができないとしたら、智慧が足りないだけです。われわれが早急に考えるべきは、全ての子どもたちが持つて生まれたものを犠牲にせずに、活かせる教育ではないでしょうか。小手先のことをやったところで、トップは生まれません。

林 今はどちらに住んでいるのですか。

山田 去年の3月11日の大震災まで、東京の中心部に家族と一緒に住んでいたんですが、ひどく揺れました。実は、あの日がお茶の水女子大の合格発表の日だったんです。夕方5時の発表を直後に控えたタイミングでの大地震でした。揺れながら、「私は一体何をしているんだろう」と思いましたね。というのは、私は水も空気もきれいな長野県の過疎村に山小屋を持つているんですが、ただ便利だからという理由で都心に住み、山小屋を放置していた。揺れながら「生き方を考え直さなければ」と強く思いましたね。その時を境に東京の家をたたみ、山暮らしを始めました。日本でも一位か二位の豪雪地帯です。水道はありません。隣

の家までは約2キロあります。電気はかろうじて来ていますが、新聞は配達区域外。全て自分の手でやらなければならぬ自然の中で、人生を考え直してみたいなと。今でも海外取材は多いです。大学院のため週に1回東京に出ますが、基本的には山小屋で暮らしています。ある意味、座禅を組んでいるような生活です（笑）。山の中の生活はすべてが自分と向き合うことです。全てが自分に跳ね返ってくる。本当によい経験をさせてもらっています。

林 これから、インドと日本はどんなふうにお付き合いしていけばいいでしょうか。特にビジネスのパートナーとしてインドの人とお付き合いしていくにはどうしたらいいでしょうか。

インディアンと日本人の文化の違いとビジネスの理解

山田 インドブームが伝えられるや、単なるお金儲け目的でインド、インドと言いだした人が多いことを危惧しています。すべてがいけないと言っているわけではないですが、危険だと思ふのは、インドが何であるかを理解しようともせず、研究も

全くせずに行ってみようとなだれ込んでいて、失敗している人たちもたくさんいます。よく見受けられるのは、中国と同じやり方でやって、暗礁に乗り上げるパターンです。同じアジアの大国で、中国とインドはひとまとめにされがちですが、似ても似つかない国です。もし、インドに進出するのであれば、やり方をインド式に変えなくてはなりません。それと、インド人のプライドはヒマラヤよりも高い。そのことは、常に意識していたほうがいいですね。インドはアジアの文明・文化をつくりだしてきた国で、それに対する非常なプライドを持っています。日本人は忘れっぽいところがありますし、

残念ながら最近では数字や形に表れる表面的なものだけを評価する人が増えてきている気がします。インド人はお金儲けをしながらも、その根っこには何千年前から続く哲学をしっかり持っている。日本人がその2つを持つているかという点、損得勘定だけでインドへ行くパターンが多いのではないのでしょうか。インドにおける鈴木自動車の成功はあまりにも有名ですが、その成功の裏には、タイミングがよかったとか、インドと鈴木

自動車の欲しているものが合致したとか、いろいろあったでしょう。しかし、鈴木さんからインドに向けられた敬意と、インドから鈴木さんに向けられた敬意、相互の敬意があつてこそ成功ではなかったかと思えます。人間としてこの人を深く尊敬できるかどうか。いざというときに自分のお金を投げ出しても、この人を助けられるかどうか。ビジネスの原点はそこじゃないかと思えます。ひとつ興味深い例を挙げましょう。

南インドのケララ州というところにメノンさんという名のインド人がいました。あるときメノンさんは公務員試験を受けるために電車を乗り継いで何日もかけて首都デリーに向かったのですが、デリー駅についてみると財布がなくなっていました。知られたか落着いたか。知る人もなく電話もない時代で途方に暮れて人混みの中に立ちつくしていると、むこうから、ターバンを巻いた見知らぬ老人がやってきて、「顔色が悪いよ。うだが、大丈夫かな」と声をかけてくれた。メノンさんは、藁にもすがる思いで、「私はケララの者ですが、財布を失くしてしまつて、困り果てております」と答えたそうです。

ると老人は自分の財布からお札を何枚か抜き出し、メノンさんの手に握らせると、そのままスタスタと立ち去ろうとしたではありませんか。驚いたメノンさんが「どこのどなたか存じませんが、地獄で仏とはこのことです。数日中にお金はお返ししますので、ご連絡先を教えてください」と言ったところ、老人は「私は困っているあなたを見かねてこのお金をあげたのです。私が勝手にしたことですから、気にしないでよろしい。どうしてもお金を返したいのなら、今のあなたと同じように困っている人

にあげなさい」と答えたそうです。そういう哲学が、今もインド人の根底には確かにあるように思います。一番大切なものはお金ではないんです。プライドや深い尊敬の念が、お金より高い価値を持っているんです。そこを理解できないとインドを理解するのは難しいかも知れません。尊敬されなければ、いつまでたってもいいビジネスができないかも知れません。これから進出される方に、もう少し具体的なことをアドバイスするとしたら、例えばインドに支社をつくるなら、若い女性を支社長として送ってみたいかがですか。イン

ドでは実は女性も大きな力を持っているんですよ。女性が首相だった時代もあります。現大統領と、最大政党の党首も共に女性です。女性の医者さんも非常に多い。女性の社会進出はむしろ当たり前のことなんです。また、一般的に、日本人男性は若くてきれいな女の人がいるバーがないとダメですよ(笑)。これはインドでは大きな弱点になります。ゴルフも、本来インド人の文化じゃない。インド人と親しくなる一番の方法は、お互いの家に招き合って家庭料理をふるまい、チャイを何杯も飲み、ああでもない、こうでもないという日が一大家族でおしやべりに暮れることです。これがインド流のもてなしであり、ビジネスもそこから進むわけです。そういうところに入っていくには、日本の男性は慣れていない。むしろ女性のほうがあつという間に入っていくのと思います。30代くらいは、心身ともにやる気満々の日本人女性を支社長に抜擢してみる。そのほうが部下のインド人も生き生きと働けるかも知れませんよ。

林 いい話ですね。勉強になりました。

山田 心配性で責任感が強すぎて、なんでも自分で引き受けるタイプの知人が、ある時、生きているのがいやになってしまった。これは危ないと思って、インドに2、3カ月行くように強く薦めました。そうしたらインドへ行く前の姿が嘘のように強くなって帰ってきました。日本はぼんやりと霞がかかったようなやさしい土壌です。今、日本では年間3万人の自殺者が出ていますが、風土の問題もあるのかなと思います。『死との対話』という本を以前書いたときに、世界の自殺率を調べてびっくりしたんですが、気候風土と自殺率には深い関係があるようです。インドの大地には、人間を強く変えるエネルギーが宿っているように思いますね。

インドの奥深さを知るためにインド人を危惧

一角。本当に凄いのは、そこではありませぬ。インドの小学1年生の算数の教科書の1ページ目に何が書いてあると思いますか。日本ならば、

「1、2、3、4、5」と数字が載っています。私が持っているインドの算数の教科書の1ページ目にはな

んとインド憲法の一文が載っています。国民の義務と権利が載っています。私の知る限り、他の教科の教科書も1ページ目に国歌や国旗の話

載せている。「あなたはインド共和国の一員である」ということを、小

学校に入つてすぐの子ども達に自覚させるわけです。そこから学習が始

まる。算数の教科書の場合、そのあとは楽しいお話がイラスト付きで

延々と続きます。しかも英語で。子ども達が大笑いするようなコメディ

タッチのお話なんです。実はそこで内側、外側、上下、より近い、よ

り遠いなどの空間認識を徹底的に教えている。じっくり時間をかけて、

宇宙と星との関係とか、隣の人と自分との関係性とか、自分の体の中が

どうなっているかとか距離や位置関係をまず学ぶんです。トポロジーも

含まれているかも知れない。とにかく最初から驚くほど話が深いんです。

林 すごくですね。大学のセンター試験はマークシートですが、インドでは微分積分を完全証明で解きま

すよね。

山田 当然ですね。むしろ意見を

聞いているとあれが当然だと思いま

す。林 そこは少し日本も勉強した方が

いいと思いますね。

山田 せっかくこれだけインドと

付き合うきっかけがある時代に来て

いるのに、ほとんどの日本人はイン

ドの表面だけで満足してしまい一番

おいしいところをほとんど見ていな

すね。ぜひあの深さを丸ごと自分の

ものにしてほしい。

林 日本が工場などで進出する

ときに一番困るのが、土地の所有権が細かく分かれ複雑なこと。そのため

になりました。場所にもよりますが、インドには余剰な不動産がかなりある

ように思います。持っている人はひ

とりで何軒も持っている。本当の友

達だと「自由に住んでいいよ」と家

を貸してくれたそこで借金儲けをし

ようとさえしない。一日懐に飛び込

んで家族みたいになってしまふとい

インド人ほど頼りになる人はいませ

ん。

林 表面的な関係だとうまくい

かないですね。

山田 私の住んでいた同じ町内に

イギリスのBBCの支局長が住んで

いたんですが、彼はもう何十年も

インドに住んでおり、腰の据え方が全然違う。当然ヒンディー語はネイ

ティブ級で、「ジャーナリストとして

ここで骨を埋めます」というんだ

からよい番組が作れるに決まってい

ますよ。日本がインドへ送り込む

べきは、まさにそういう人材。ちよ

っと大袈裟に言えば、現地で骨を埋

めるくらいの気概がほしいですね

(笑)。腰が引けているようではビジネス

でインド人に勝てるわけはありません。

林 世界における日本の果たす

べき役割は何だとお考えですか。

山田 今の日本人は他者と自分を

比較することしか自分の価値を見

出せなくなっている。そのことが自

分の首を締めていると思います。日本全体がそうなってしまっている。その、他者と比較するという価値観から一旦逃がれて、この国のよさをもう一度見つめ直すことができれば、もう一度育むことができれば、しばらく減速するでしょうけれども、最終的に日本は世界から尊敬を集める国になれるかも知れない。それが生き残るための道だと思えます。例えば自国の文化というものをどれだけ日本人が理解し、大事にしているか。外人のほうがよく知っていたりしますよね。未曾有の大地震にも襲われたことで、どうでしょう、ここで一度立ち止まって深呼吸をし、日本人とは何か、日本はどこを目指そうとしているのか、自分はどうな人生を描こうとしているのか、世界の中の自分、日本の中の自分、家族の中の自分、色々な視点から徹底的に考えてみては。今という時は、そうするためのちようどいいチャンスなんじゃないでしょうか。そして、今を逃したら、そのチャンスはもう二度とめぐって来ないかも知れない。そう、むしろ千載一遇のチャンスなんです。今という時は――。